「ASK?映像祭2020」総評　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　木邑芳幸

今年のアスク映像祭2020は作品募集期間中にコロナ禍が発生し、審査、上映会にも影響及ぼしている。作品の多くは去年の段階で完成しているであろうから、作品への影響は限定的と思われるが、作品を見る側の感性への影響は有るかも知れない。

今年大賞となった西尾秋乃の「escape」は、身体と魂の境界が曖昧で日常の風景に魂を思わせる白い幽体のようなものが多数漂う作風であった。列を成して次々に消滅して行く幽体は天に召される人類の定めを連想してしまう。コロナ禍の於ける不安と生命の対する再認識など、正に時代の気分を反映した作品で有ると感じた。

久里洋二賞は瀬尾宙の「anipulatio」であった。「manipulation」を想起させるスペルであるが。「manipulation」は和訳では「操作」である、作品は繰り返されるシンプルなシーンとシーンの配列を示すピクトグラム的なシーンによって成り立ち、配列により、シーンは様々なシークエンスのバリエーションを成して行く。まさに作者が意図するアニメ的操作の面白さが具現化されている作品であった。画面構成は左右を切り落とした正方形である。なるほど、「 manipulation 」の左右を切ると「anipulatio」となる。 作画も魅力的なので、今後の展開が楽しみである。

西村智弘賞は川上喜朗の「蛍火の身ごもり」であった、少年が妊娠し、出産するという特異な設定のストーリーで有る。影絵のような独特の光の使い方で主人公の孤独な世界を描いている。自らの子供を出産する結末ではあるが、ジェンダーを超えた自己のアイデンティティーの再確認を描いているようにも思えた。

ASK?賞は川畑那奈の「ONE WORLD」であった、人を模した小さな球体の生き物が戦争、蚊の襲来など、様々な禍に巻き込まれて行く、デジタル時計のコラージュなど、あたかもゲームの様に展開していく様は、個人の力では及ばない世界の摂理を感じさせる作品であった。音楽の使い方も効果的であった。

中村匠吾の「COMET」は、孤独で詩的なナレーションと宇宙の静寂が印象に残る作品であった。村岡由梨の「透明な世界」作者独自の世界に基づいた作品である。フィルム時代のアンダーグラウンドなテイストを感じるが、印象深いシーンの積み重ねは魅力的である。

平松悠の「ひなんて、なくなってしまえ！」は「ひ」という文字をピンポイントで取り上げたミュージカル仕立ての作品であるが、奇想天外な展開が魅力的であった。

北林豪の「My self」はロボットのお話ではあるが、とても人間を感じさせる作品であった。くりたもねの「ブラジャーねこ」は自由に生きる姿を猫に託して描いているが、コミカルで元気を貰える作品であった。門井建の「瓢亭」はとんかつ店の日常をドキュメンタリータッチで描いた作品である。実写の作品であったが丁寧に料理のプロセスを描くと共に、働く人の息づかいまで伝わる作品であった。村田香織の「わたしたちの家」は家を模した枠の中に様々な愛のストーリーがシンポリックに美しく描かれている。どのシーンも一枚の絵となる完成度でセンスの良さが印象に残る作品であった。